

富士見の歴史講座 第五回 平成25年6月29日(土)10:00~12:00

「明治維新」と「埼玉」

埼玉県立 歴史と民族の博物館 学芸員 佐藤 美弥氏

富士見の歴史講座 第五回 平成25年6月29日(土)10:00~12:00

錦絵から読む、戊辰戦争に対する民衆の心情と立場

埼玉県立 歴史と民族の博物館 学芸員 加藤 光男氏

報告： H. S.

今回も51名の多くの方が受講され、スタッフとしましては嬉しい次第です。講師の方が変更になり、受講案内のテーマと違った内容にはなりましたが「錦絵から読む」という、新しい視点からの講義は非常に面白い内容であったと思います。

講師の言われる「古文書は史実は記述しているが、庶民感情については、当然のこととして記述されていない。しかし、戊辰戦争のころの江戸っ子の心情は錦絵に描かれている」とする。その例として12枚の錦絵と解釈文が披露された。

史実に基づきヒーロー感情、庶民感情を推測しながら歴史小説などは書かれているわけでしょうが、錦絵によって、庶民感情が端的に表現されていることの面白さも新発見。世相漫画好きに最適の勉強資料と思いました。

<<受講風景>>



錦絵の美しさ、世相解釈文など、全部載せたいのですが、いろいろな諸事情がありますので、許された2枚だけ載せることにします。

■鳥羽・伏見開戦から江戸城開城まで（慶応4年1月～4月）の1枚



（資料1）幼童遊び 子をとろ・子をとろ（子供遊絵）町001・奈2-①／現在展示中

改印：「辰二改」の一印（＝慶応4年二月改）、絵師：歌川広重（3代・歌重）

版元：、丸屋平次郎（日本橋博正町）

二月に検閲を受けていることが改印から確認されるため、現在確認されている戊辰戦争を風刺した作品の嚆矢（こうし）といえる作品です。

「子をとろ」の子供遊びは、鬼遊びの一種です。二手に分かれた子供たちが、先頭から順に前の子の肩をつかんで繋がり、お互いに先頭の子が親（鬼）となって、相手側の最後尾の子供を捕まえるものです。片方の親が尻尾の子供を捕まえると、自軍の後尾につけます。このため最後尾の子を捕えようとするのを、列の一番前の親が両手をひろげて、これをさえぎります。そして、ある時点で長い方が勝ちという遊びです。この子供遊びに仮託して、新政府側と旧幕府側の二派にみたてたものです。

画面右側には、先頭の薩摩藩（絁・カスリの着物＝絁は薩摩の特産物）、次いで尾張藩（着物の柄が大根＝尾張大根は大根のブランド品）、土佐藩（着物の柄が亀の甲羅＝高知のコウをかけた）などと続き、最後尾の「長松どん」は長州藩（着物の柄が萩＝萩は長州藩の本拠地）である。長州藩に背負われて（担がれている）のは、幼い明治天皇（緑の服と肩に付けた赤い布＝官軍が「錦の御旗」〈菊紋の入った緑色の旗＝正確には有栖川宮所用の錦旗（きんき）を掲げて進軍、その兵が錦旗を獲した朱色の布きれをつけていた。緑地の着物に「金」の文字＝当時、天皇に対する呼びかけとして「きんちゃん」）です。戊辰戦争の風刺画では、明治天皇は幼子として描かれています。なお当時、天皇は17歳（満年齢なら15歳）でした。官軍の長とはいえ、長州などに庇護されていた存在だと捕えられていたため、赤子として描かれたと思われます。戊辰戦争時の風刺画では、天皇は赤子として描かれます。

一方、画面左側には、先頭に会津藩（家根冠の下に當（当）の字は会津名産の「きがけ蠟燭」の名店名「當屋」）がいて両手を広げて迎えうつ姿で描かれています。続いて桑名藩（着物の柄がハマグリ＝蛤は桑名の名産）、庄内藩（酢漿草（かたばみ）紋の烏帽子（えぼし）を被り、扇にはサカある。酢漿草を定紋とする庄内藩酒田家）、姫路藩（注連縄（しめなわ）模様。江戸っ子は「ひめじ」と言えずに「しめじ」と言っていたことから考案された）です。なお、姫路藩が立てている旗は、同藩の船印に、同じ酒井家である庄内藩の、朱の丸印の旗指物を重ねたものと思われます。

頭に手を当てて、「ライ、あいぼう（＝会津藩）チャン、しっかりやんなえ。後ろに俺がついているから大丈夫。」と言っているのは、最後の将軍・徳川慶喜（着物の柄が、一の字をつないで梯子を形作っており、一のはし＝一橋となる。一橋家から将軍になった慶喜）を意味します。

画面右上の女性は和宮（静寛院宮、第14代将軍家茂の室、戊辰時23歳）、女性に負われている子供は田家亀之助（徳川御三卿のひとつ（戊辰時6歳）・着物に「田」の文字）。

新政府軍は、きちんと列を組んでいるのに、旧幕府側は組んでいません。これは、新政府軍が東征軍として進軍しているにもかかわらず、旧幕府側は戦の体制が整っていないことを揶揄したものです。そのなかで、慶喜が先頭に立って指揮していない現状では、戦うなら会津藩が先頭にたってほしいといった、江戸庶民の感情が反映されています。

当時、討幕派の志士と呼ばれていた人達の間では、「玉（＝天皇）を取れ」といった隠語が盛んに用いられていました。鳥羽伏見の戦いが起こり、旧幕府側は、錦の御旗をかかげる新政府側と戦う立場になってしまいました。この絵は、「子をとろ」の遊びを借りて、薩長に担がれた天皇を、旧幕府側が、取り返そうとしていることを、表しているのです。

■会津城攻防戦前後（慶応4年6月～10月）の1枚



(資料 12) 当世長ツ尻な客人 (大人戯絵) 町 56・奈 2-37

改印「辰八月」(一慶応4年8月)、絵師：歌川歌重、版元：

江戸城を意味する「東楼」の客座敷(画面右上方)には、床の間を背にした主客の位置に東征大総督兼江戸鎮台であった有柄川宮(川の文字のバッチワーク)が座り、宮様の右に土佐藩(三つ柏の柄)、左に長州藩(一の文字に三ツ星紋)が座し、薩摩藩(蛇の目の柄)が踊っており、料理を前に、まさに宴たけなわの状態です。

襖の陰に隠れるように描かれる芸者は、田安慶頼(よしのり・田の文字)であり、「この芸者もよんどころなく調子を合わせている」という詞書にもみられるように、薩摩藩士の踊りに仕方なく伴奏をつけていることがわかります。徳川御三卿の田安慶頼は、寛永寺に謹慎した15代将軍徳川慶喜に代わり徳川家をまとめ、努めて新政府に協力した人物です。東征軍の江戸占拠以来、薩摩・長州・土佐藩の者たちが我が物顔で江戸を徘徊する一方、慶頼が有柄川宮のもとで江戸市中の安定に腐心していたことがこのように描かれているのです。

画面左上方をみてみましょう。左が料亭の女将として描かれた天璋院(篤姫、ススキの柄)、右が女将の娘として描かれた和宮(下がり藤の柄)です。和宮が「本当に長ツ尻なキザな客人、早く帰るように呪いをしてやりましょう」と草履を裏返して置けば、天璋院は「このぐらい呪いをしたら良いな、懲りてもう帰るだろうね」と座敷箒を逆さまにして手拭いをかけて立てようとしています。

天璋院と和宮は、東征軍に早く出て行ってもらい、再度入城したいと考えていたと庶民はみていたのです。実際は、徳川家臣の安堵を見届けないうちは上京できないと、和宮は朝廷からの勤命による上京勧告を断り続けていただけなのですが。

最後に目を画面右下方に転じてみましょう。東楼の門をくぐって、「四～五人のつれがある。よい座敷があれば借りたいのだが、空いているか」と女将に尋ねているのは仙台藩士(仙台牡丹の柄)です。門の前で、座敷、つまり江戸城が空くのを待っている者は、会津藩(松葉)を先頭に、米沢藩(米の文字)、徳川慶喜(一の字つなぎ)、庄内藩(酔漿草(かたばみ)紋)です。この東北・北陸地方の藩士たちは、奥羽越列藩同盟を結び旧幕府方として東征軍と戦った者たちです。会津藩士がにがりきった顔で後ろを振り返ると、米沢藩士は「さあさあ、お入んなせえ。まずともかくも」と話しかけています。最後尾の庄内藩士が徳川慶喜に向かって「かしら、さあお入んなせえやし」といえば、慶喜は「豪気で賑やかだなあ。座敷があればいいが」と答えています。

一見したところでは、料亭での宴会風景を描いただけの絵に見えるこの錦絵は、江戸っ子がいかに新政府嫌いであったことを伝えています。

江戸庶民が新しい支配者を快く思っていなかったことを、新政府は見逃しませんでした。慶応4年9月8日に明治と改元、天皇が10月13日に東京入りして江戸城を皇居と定めた後、12月19日に東京府民に酒を振る舞い、人心の掌握を図りました。庶民はこれを「天盃頂戴」として喜び受け入れたといいます。こうして新政府は近代国家建設をめざしスタートを切ったのでした。

■ 講義で使われた12枚の一覧表

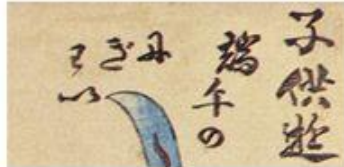
(1) 鳥羽・伏見開戦から江戸城開城まで(慶応4年1月~4月)

資料1 幼童遊び

子をとろ・子をとろ

資料2 子供遊び 端午のにぎわい

資料3 当世三筋のたのしみ

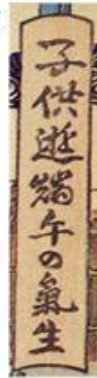


(2) 江戸城開城後から列藩同盟成立前まで(慶応4年4月~閏4月)

資料4 子供芝居忠臣蔵四段目

資料5 子供遊 端午の気生

資料6 世乃中天眼鏡

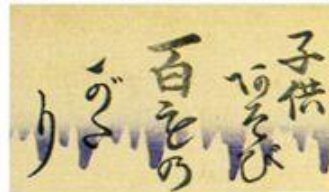
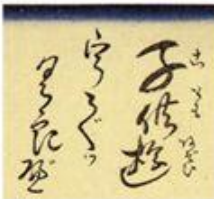


(3) 奥羽越列藩同盟成立後(慶応4年閏4月~5月中旬ごろ)

資料7 子供遊 うでっくらべ

資料8 当り籤講母子の寄合

資料9 子供あそび 百ものがたり



(4) 会津城攻防戦前後(慶応4年6月~10月)

資料10 子供遊 お山の大せう

資料12 当世長ツ尻な客人

資料11 子供 げんくわの圖

